

A. 感じる、感動する

A-1. 水っておもしろいね なかの保育園(島根県出雲市)

[3歳児]

子どもたちが日々のあそびの中で「なぜ」「どうして」と不思議に思い考える心は、どのように動き、発展していくのか、その「科学する心」を保育者はどう捉え、どのようにかかわっていくのか見つめた。

水を流す遊び

4～5月

ごちそう作りに少し水を取り入れたことで、ベトベト感が楽しくなり、水を使った遊びをするようになる。次第に、トンネル堀りから川作りが盛り上がり、全身で泥んこになって水と砂の混じった感触を味わう。その川作りから、「もっと水を流したい！」と思うようになる。そこで、竹や樋を子どもたちの目に入りやすい所へ設定する。初めは樋を庭の平面に置いていたため流れなかった水も、“水は高い方から低い方に流れる”という子どもの言葉がきっかけとなり、角度をつけるといいことがなんとなく分かったようだ。そして、「これのせてみよう！」と樋の上に小石を乗せ、水の勢いで転がる面白さを体験した。また、空のペットボトルを乗せて水を流し、ロケットに見立てて発射させ遊ぶ姿が見られるなど、水の流れを楽しんだ。こうして、より遊びが広がっていった。

水鉄砲

6月

全身で水の感覚を楽しむようになり、ホースから勢いよく水が出てくるのを見て、「水鉄砲みたい」と言う。その子どもの言葉から、水鉄砲を作つて置いた。さっそく「作りたい！」と言い、一人ひとりが自分の水鉄砲を作つた。自分で作った手作りの水鉄砲で、自分から喜んで遊んでいた。

他児に目を向けることで形の違いに気付いたり、貸してもらいやってみることでその形がよく飛ぶことや硬さの違いなどを発見したりしていた。水がたくさん入っているとよく飛ぶことが分かった。(中の水の量とペットボトルの角度の関係はまだ分からぬ)

色水作り

7月

| 子どもの活動 (保 = 保育者) | 保育者の支援 |
|--|---|
| <p>4歳児の刺激を受けて、保育者と一緒に、花壇に色水用の花を探りに行く。</p> <p>保 「色の出るお花はどれかなあ」</p> <p>C児 「これは？僕、黄色がいいな。先生これ黄色になる？」</p> <p>保 「ん～どうかな？」</p> <p>B児 「わあ、このお花かわいい！私これで色水したい！」</p> <p>保 「どんな色が出るか楽しみだね」</p> <p>いろいろな色の花を探り、色水コーナーに持っていく。</p> <p>B児 「どうやったら色が出る？」</p> <p>E児 「Tおにいさん（4歳児）これ使つらいたよ」</p> <p>それぞれが、おろし金や茶漉し・すり鉢を持ち、試し始める。手で揉んでいる子もいる。「見てみて！こんな色が出た！」「私も！ほら。こうやったら色がでたよ」とこすったり、潰したりして見せる。</p> <p>C児 「黄色のお花、やっぱり黄色だったよ」</p> <p>B児 「あのかわいいお花で、こんなピンク色が出たよ」</p> <p>E児 「私のきれいに色が出たけん、とっときたい！」</p> <p>A児 「私のも机の上に置いといて。お母さんに見せてあげる」</p> <p>保 「素敵な色が出たね。大事にとっとくね」</p> <p>みんなが色を出している中、E児は水の入ったペットボトルに花びらを入れ、蓋をし振っている。 一生懸命振るが色が出ない。</p> <p>E児 「先生、なんで僕のだけ色が出らん？」</p> <p>保 「なんでかな？友だちはどうやって色を出してるんだろう」</p> <p>E児 「それどうやつた？」</p> <p>F児 「こうやつたよ」と言い、茶漉しを持ちやり方を教える。</p> <p>E児はかごの中から同じ物を選んで持ってくる。 まねしてやってみると少し色が出る。</p> <p>E児 「先生、僕も色が出た！」</p> <p>保 「ほんとだ、よかったね」</p> <p><とてもうれしそうだった。E児のも机の上に並べた></p> | <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが、色を出してみたい！という気持ちを受け止める。 子どもたちと一緒に期待を持って楽しみにする。 見たり聞いたりして友達同士で教えあっている姿を温かく見守り、困った時は気付けるような言葉かけをしていく。 試してみて花と同じ色が出ると気付く。 子どもの感動・うれしい気持ちを大切にしたいと思い、棚の上に並べておく。 「なぜ」「どうして」の解決方法は様々な環境にあると考え、周りにも目を向けるよう言葉をかける。 自分の力でやり遂げられたE児を認め、誉めて自信につなげていく。 |



色が消えた!!

| 子どもの活動 (保=保育者) | 保育者の支援 |
|--|---|
| <p><翌日>登園すると、昨日作った色水が見たくて走ってやってくる。</p> <p>A児 「先生、色がなくなってる！」</p> <p>保 「あれ！！ほんとだ！」</p> <p>A児 「昨日ピンクだったのに、なんでだろう？」</p> <p>保 「なんでだろう？」</p> <p>C児はペットボトルを振ってみる。変わらない。もう一度振る。変化がない。</p> <p>D児 「先生が魔法かけたんじゃないの？」</p> <p>保 「どうして色がなくなっちゃったんだろうね。」</p> <p>A児 「不思議～・・・」</p> <p>C児 「お水が多かったけんじゃないの？」</p> <p>A児 「ピンクやオレンジは消えるのかな？」</p> <p>保 「じゃあ、少しのお水ならどうかな？」</p> <p>D児 「たぶん大丈夫だと思うよ」</p> <p>保 「やってみる？」</p> <p>子どもたち 「うん。違うお花もやってみようよ」</p> <p>花の種類・水の量を変えてもう一度作ってみる。</p> <p>水の量を（多い・中位・少し）、花は、（マリーゴールドのオレンジ・あさがおの紫・インパチエンスのピンク・ヤマゴボウの実のピンク紫）にし、それぞれの色水を作る。</p> <p><次の日の朝>子どもたちが棚の所に足早くやってくる。</p> <p>子どもたち 「どうなってるかなぁ・・・」</p> <p>A児 「やっぱり消えてる！」</p> <p>D児 「でも三つ残ってるよ！同じ花だ」「ほんとだ！！」</p> <p>一つの色水以外はまた色がなくなっていたので、子どもと保育者は再び驚く。しかし色が残っているのを見つけ、なんだかうれしそうにしている。</p> <p>保 「水を減らした色水はどうなった？」</p> <p>C児 「多いのも、少ないのも関係ないみたいだよ」</p> <p><色が残っていたのはヤマゴボウの実で作った色水だった></p> <p><他の花は水の量に関係なく、色がなくなっている></p> <p>A児 「なんでこの色だけが残ったんだろう」</p> <p>D児 「一つ残ったんだから、他にも消えない花があると思うよ」</p> <p>保 「そうだね。どれが消えない花かみんなで見つけよう」</p> <p>D児 「いろんなお花でやってみたいね」</p>  | <ul style="list-style-type: none"> · きれいにピンクやオレンジの花の色が出ていた色水の色がなくなり、透けていたのでなぜ色が消えたのか子どもと一緒に考える。 · 子どもの“不思議”と思う心を大切にし、子どもたちと一緒に水の量を減らしたり、いろいろな花で試し考えて色水作りをしたりする。 · ペットボトルに花の名前を貼り、どの花の色水か分かりやすくしておく。又、見やすいように種類別に置く。 · 保育者も昨日作った色水がどうなったか気になり、ワクワクしながらやって来て、子どもと一緒に見てみる。 · 水の量にも気が付いてほしいと思い、質問を投げかける。 · 色がなぜ消えるのか、どの花なら消えないのか、色が消えないようにするにはどうしたらいいのか一緒に試していくと子どもたちに話をする。 |

考察

子どもはただ遊んでいるのではなく、遊び一つひとつに意味があり、「なぜ」「どうして」の繰り返しの中で大きく発展していくのではないだろうか。不思議に思う心は、誰の心の中にも存在している。しかし、保育者がそこにどうかかわるかが科学する心を育むポイントとなるように思われる。保育者は常に一人ひとりの興味や関心・方向性を把握し、タイミングよく素材・材料を用意したり、環境を整えていくことが重要であり、また、子どもの気持ちになって喜んだり感動したりする感性の豊かさが、個々の心身の育ちにつながってくるのではないだろうか。

ポイント

砂場で存分に水を使って遊んだり水鉄砲でさらにダイナミックに遊んだりして、身近な「水」に十分に親しむことで、興味深い教材になり、3歳児なりに水の使い方や特徴を感じて遊びを楽しむようになります。そうした姿が、色水遊びで「自分の思った色を作る」「きれいな色を作る」という3歳児なりの感性で、探索や追求することにつながっています。**遊びながら様々な感性が育まれ、「思うようにできた」という自分なりの満足感や「きれいになった」という感動を味わっている**ので、翌日の色水の変化は大きな発見であり、さらに心が動かされて探索や追求することにつながる出来事です。こうして感じたり気付いたことに心を動かし、3歳児なりに、遊びを意欲的に継続して「科学する心」が育まれています。